春色梅児譽美 巻の五

江戸 狂訓亭主人作

第九齣

まゝならぬ所をもつて夜憂中にまよふ恨を是思ひつゞけ
ゆめにも似ざる所にお長ハ独りくらすと姉のお由が当時の
宿よりハつねびける意の欲するにあらねばあとさきしらぬ
恋慕の情のいやまさる男のうへと米八が容形うしき
有様も元ハといへバ金ゆへふかいさへ古主の当までゐる

がしろにする其の風情まこと丹次郎も米八が見継に月日を送る身のうへにいまだ中ぞらの外に告ねど心の中又捨られぬ時宜ありとしらばぞ其身より丹次郎を活業として思案にくるゝ門口へ見えしは若者二三人
若「アイびんろうさんへまや姉さんは留守かへ
米「ハイ今日はチト遠方へまゐりまして在ませんが何ぞ御用でござゐますか
若「さやうサ外でもないが其の姉御は女なれどいかく人の世話をやきるが　もうちつと此節わづらつて居る彼の丹次郎は

かくまつてあるも知れねへ尋ねてこいと代官所から
厳しいお詮議なれバ此宅にハおかれねへでも何処ぞ近所に
かくしておかれる姉さんが手柄にお遠ないと思つておつしやるが捕手
の役目志じおいらが主の付ら其それとての仕合でえへ
縄目はおよんでも又言上げの仕合も在う姉さんの姉さん
ハ当分でもお妻へが丹さへの在所を知らずに居るがそのうち
云へどもくさとして姉さへも私もその所を知るお方ハ云へへ知られぬ
るがある女のうちもお妻へハその丹さへといひ名づけて別

ましくふあらこのが又出斎途中で出合ていろ〳〵咄しを
しつるうちで智恵くらべせよ一〽イヤ立どうして三人〽イヤ立ど
して知られぬと強盗いやうる是非がねへそのうちはらといおめ
へでもいふて見ろでおいてもいふ者かヨ一〽それよりでも私ハ三人〽孫
かくしや斬すると三人一度に立かゝりお衣を引すへて衣
おらげ三人〽ヤイこの女アやさしくしいそのうつくしい衣を
面でまじくと顔をねらふする所をやにはに丹次がゆく衣
いそがれへと戴くこぞとと雲より首を出してなを女の捻返さ

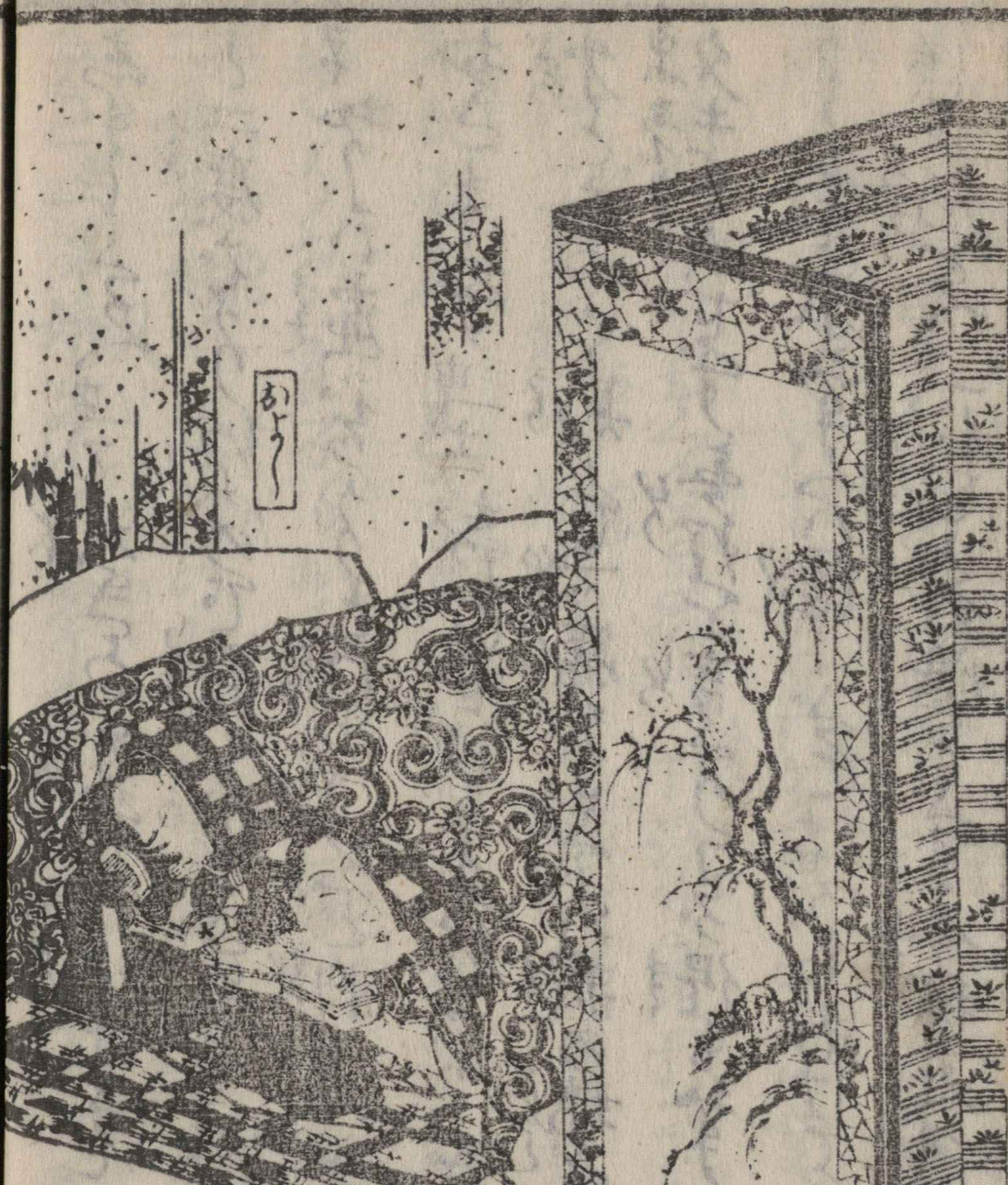
まてく口惜渓　長へアヽどふぞ堪忍して下さへまし
三人へそんならば丹次郎が在家といふか　長へイヽヱ何と
おつしやつても丹さんとやらの在家ハぞんじません
くいしどふぞおゆるしなされてくださいまし　三人へヱヽ此あま
づら面さらしても男の在家をいわねへとハ見上たよいぞうず
てまへも同罪お役人さまがお出があればさぞてこずらう
とおもふが情じやでおいらが世話してやる情強くせう
ねへといふなどぶれへ是から御代官さまへ引ずつて行て

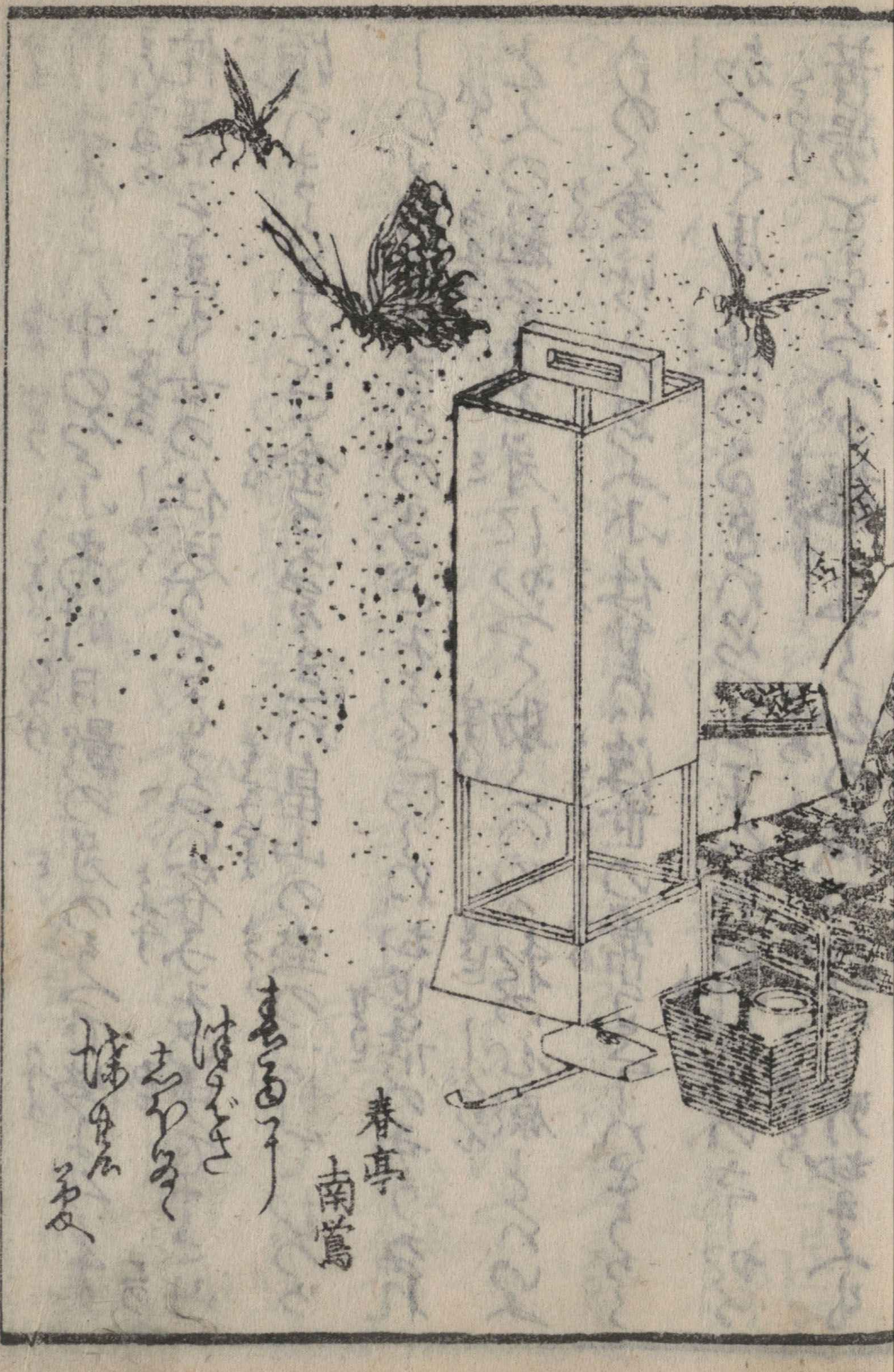
おのれ責く白状させろといへバあくまでも今さらて丹
江都が落度といへハ鼻山ゟの金の一件千五百両と
いへ大金ゆゑどこまでも中も覚えありや日延もでき
ぬへ物でもねへそれが出来ねへ則ありや丹次郎ハ
衛の頭人ならし丹次郎が身を大切にいたして金の五面を
さよふといへ人ハめつらしふえも見しまへイヤとんだ事をいひざる
お世話ござりまさくさりさぶねへお代官所で言上げしや
まとと無断やおるさ手めで三うえとする表の方丹次

彦ふ縄をうけ村の役人附そへ所の目明し二三人お由が
宅の容子をうかゞひ見まもる頭人が此通りまさしく枝葉
の者ハ進て此浦辺その女ハ男宅へあづけてせく妻女
とのみ婆よお春ハ洞の目をさらひけれバ良ぞや丹次郎
ハことさら見すくきいましめの縄もうしめし憂るの飛
重たありて来るめうと晒らしくも聡しき良さしかる懐
の洞ふ古かる道の廿やお春ハもろずもりぞすがりながら
くを押隔月ことし姉へどらしさかんご人の側へ従ふ

くと寄てみれバ己までも同勢と踊し人〳〵さま〴〵倒れておてふその
まゝ同じ村の人〴〵ハ円蔵を引起そへておてふハ母もうく起あがり
てふ「アレマア待てもらんふさいより円蔵さん円蔵さんと取縋
あげる一生懸命姉のお由が取すがりて由「コレおてふさん
おてふがやうやうとさま夢とつれてくるの目を覚しみるといひそうひ
よく〳〵うなさるゝおてふさん〳〵と呼起され目覚てみれバ
一ッ夜着に姉とは添寝の真夜中にて身ハ冷汗の気色ま
ろくさてふ「オヤ姉さん怖い夢を見ましてござります大きなる夢でも

あけしらる人へ米「アノ大きなる声で丹次郎さん丹さん
と二度ばかりいふので私も目がさめる米「是トびつくり
まや抑ハ虚だらうとはおもへど胸さへぎく動乱へおぼ
思ひまさず米「主おかしいけれどもあの子へかぎる縁で見ゑ
夢とおもつく影して一ツ寝もつれハ誠の妹だとおくべ朝
夕まぐれ思ひまぜず妄りを言ひうりこちら但もおまへ不隠てねむ
めぐりそまへ不意をつ隠しぶそなぞうちあけてハ嬉しさねのだえ
米「まや何をへ申「何のとへ根をどうぞ今おまへが寝言を言ふ


およし
お長


春亭
南鶯

丹さんと二人中のよい當時月影の身のうへで然よくくらす
侘居なれども女の仕送りでたつるは容子その中で此
頃はまつしまるゝと金づるあるをべ畠山の宝の一件でむづか
しいことのふあるそのるいぞとそうぐしいぬお世話の母うあれ
ど人の難義を身にひくて助るのが親の心底とゐは又
のゝ金ばくれども不任せぬ浮世の常ことゝいふもう
知つゝく居る他のるあとれども見まいその丹さんのさしかゝる
苦労とまさうよが操と母うもの誠の孝は一所おまへも

思案のつけどころもあるまいかへ ト いふを聞て妻は 妻「コレ是は
あるねそのお子さんの身の難儀とは そりやあまり今
のが正直で ト 是より今一ト由来の 由「そふして金がちつとも
早く金子ほしくなる都合が用立てお金がて入めぐくり
妻へ姉さん私が身をたのむぞいて 由へそれじやア私が鬼気と
勿論お前様の宅の後見に立流に住ぞうて口上がつてわいな
ごんけよあるけれどお前様の御子の人の子あと言て肌身を汚
さぞあるみ勤をさしてハ女毒と他にいはれまでも私が外聞

〽やく翌夜が明てしまへと觸智恵も出るぞよからうたゞし
私も丹さんの若旦ハ噂よ笑て居たりやうの容子ハ拙者が直
ふうで来ましたよからうといひすてゝお長ハ嬉しきても
赤坂ドいる男の身のうへおもひすてゝよくと寝られぬ
耳よ暁の撞もうぞく待あかす夜と意気地に迫り
てハ粋なる小梅の名にも似ぬ胸の煙ハ瓦焼竈に擾る
朝霧よおきてゝ勝まへさら到る折から盛る朝勤めハ
本中寺の寿量品お長ハまとおもひこむ丹江戸ぶ無

度そくさいハ壽あづまもあづく二人一所と暈るる最
こそめでたき世の中の人さまざくの物おもひ樂し心のある
人ハ富貴を志れど欲よのミふける匹婦の情なるべし
実の恋の要ハ志まらずも嗟人情を推たつまらバ人間万
事中庸のほどよくもるハいかにもおもふる

○つらんの梅ハ雪ふる志ぼ河ざき　徒然亭　一迎洋変人

○うらうらを春をむかへん雪の森　孫斎樓　小松

第十齣

丹「ヲヤお長(てう)かどふして来(き)た大(たい)そう早(はや)く来(き)たノウおいら
は今(いま)聞(き)きて無理(むり)ど何処(どこ)へ行(ゆ)くといつてそれから早(はや)く出(で)
て来(き)たのだよ　お長ハ泪をさしぐむる　丹次郎がそゞろ入すゝり　長「誠(まこと)にモウ〜どんなにか
いそいで来(き)ましたらみアて切(せつ)なさい　丹「なぜそれならいそいで
来(き)ないと　長「なぜといつて私(わちき)ハモウおまへさんの身(うへ)をきつかう内(うち)
はどふも苦労(くらう)で悪(ゐる)しくてなうのほどなれどヨ　丹「何(なん)がその
やふに気(き)にかゝるのだらう　長「なぜといつて私(わちき)ハアノもふ誠(まこと)
にきのどくなことは変代(あお)つんところ気(き)になつてそのうへ

姉さんが何卒でそう我まへの身のうへを咄してお頼なさるゆへ
今朝夜の明るのが待どうで有ましたョ丑「まことにそのことへ
我もいるよそれへ夏成つたとしよなもんでそれがしまへ承知散よ
そうしたは老があるのめへ長「ナニサ夏ばかりじやありませんへョ我まへ
さんなんぞは苦労なさるのが有じやありませんか丑「そうさ
そうしたなど何も甚ふ不案なさるのへありませんョ長「それでも
私へ此のましとね丑「所不してもそを据へぬら長「ヲヤ
わたし寒くつて淋しいといつてるのがあるへのでございますへ私が

まつしろへ参りますヨト主あがりへゐて出ます大分箱をおさへ
銭のかずま数くちいちおりまハして数へさし兵「やや見えおる
なほもちごうせ私もやくざうもつきそうもあるへヨ丹「武者く
わたしが打付ます大ぎ箱の人おゆへも米八も下らぬ米「米八
さん八見きえの宅の勝もがれておまへでらうが私ハやア気
ままへのとても麁ござりますト すじきるる是より八といふ生丹「ほんと
まされるヨ何の米八がおめへにおまへの物ぢやないでも丈夫で由おまへ
の方がおもつくと話しとあつて居るのさト ようやく出来さあつけるお

おとどびんと　長へ「兄さんそんならお金のいるのが有かや有
うり
すぜんう　丹へ「そうさちつとまつて居るけれどねぞう
あるぐらうヨ　長へ「イヱそれでもむづかしいといふがぞうも兄き
学者をして居ますヨそして今いつまでといふのが妻
丹へ「アレサマアそれで五十両あると月を延て延るそれでもさ
もそういふがあいつがせめて三十両もしらずしらず米八
きつぱりと来なよ　長へ「米八さんでよございますが姉さんもそふ
いつてくれヨ藤さんすヨ　丹へ「そうぢやうしてそれもそのぞ　長へ「其も是ぞつう

私の身とてでもきつい気で来んでありますヨそうだけ
れど女郎衆へ不自由なる事ハ一とふりならぬ事ぞ、どふぞして別段
て居ても時節自分の身らのうけられる所へ行ましヨ丹「まアまア
往来ど其「どうぞどうぞ私があづけられますくお金銭とうらくく
あげるヨ丹「まアそりやァありがたいがそれはそう不便して居る
ふそんなそのあかきをよるあのうち其「それでもどうでもしてお
金銭まつらくなれば書事がどうぞよふきいとふあのウ私ハ死
でも随よいト いひながらもどうのまアや 其「見きえんト いひつつ[illegible]

まじ〳〵と　丑「こまきさ子坊さんるるヨサ〳〵顔をながめると抱
きしめます
よせませバ嬉しそふなふう顔ハ　長「お兄さんエ　丑「エ　長「あの子
あのうどうぞ早く移して居てはつの用をしてあげうり
夜も淋しくない女ふしてお世しといつすものうはして　丑「それ
うくぢふまちのぐズ　長「一所に居てひとしゅすのサ　丑「そして
どふするのだ　長「おやじいわへそれでよいおやアないの人　丑「おいら
ハ一所に居るだろうじゃ無いか否　長「なぜ又来へさえであくっそれ
よるいのさ　丑「七ツ　あの子ふかまへおめ　長「ヨヤうそだおう大

そうお中がよへ出世ふにくる上へト白眼る
さくとの出来あのうんさ老中あるとつ云事く
ふ～すなるみ出来おおずたんぼのところ～情てぽへの忠れりもち
丹「主別懐ふ中のいとしいよこ上けへ
おへが彼是世話をして置るゝこういふ白も首さま玉へが
丹「コよりいお貞へぶぎこうろいろおもうろいぞやの二階で出来会え
が米八さんの貞へとおこころさまさるお貞と言てそのうへらう
しい国ふ乱数らしい風をして除ついて上て云よふふ入れ生
来たものゝ丹「法事しれるをいふおあへとそ一月のはしふ美く
娘とゴロつきふあるゝ今ふおいゝが世うる貧乏人ハ突出す

ごうムト いふときにどびんの湯がわき 丑へ兄ィ 兄いさんいやぢやアよ髪(かみ)が
ちゞチヂリ フウリ
よごれるからねいけねへ これ皆上をおかけを 丑へホウ清兵衛(ゑんぶ)
妻子をすうの報ゆるも
あんまりおいらが 律義(りちぎ)を 結(ゆ)てもらう 丑へサア 結(ゆ)ておくれ サアく
ト コウいふ気がつく 丑へ 結(ゆ)てもらう気 髪(かみ)は奴(やっこ)がよくよく
うかまもしくもいなかへ
坊主(ばうず)小ぞうの疱瘡(はうそう)をまウ ぺんさんへ行てもチツト 良(よし)
奴(やっこ)さんよゆすをこ 丹へねへけりや 人(ひと)が惚(ほ)れてくるもんかいろいろ
アレウ由(よし)五郎がおかみねへ 丑へよいよ見(み)さへなるたまらなくをいれて
ごまかしてをくのさ 丑へ十二 それさへ ふ気(き)がつかのめうりさ

岩へ立うそこで其読書中へ私が中へさるかどうり中まつて
お人目でなくハめをまづくおもづらあらハ寿て丹へど目く　サア
是うへうのきこい経がまつて上要う逃るときるすハヨト引留
て桜花濃のちう示の世丹へサアおそや乳母で寝かれる
ヨト引るハ負つと負去アしくもべらうこハヨトいふ家中岳ぶ
ハ名の本調子さうとふへ替々中でざし音ドめの
折こそおまし破戸がぐゝるまと押あけて入来る二人の破
落戸ばらくると是ハと驚く丹次郎おそハ丹の義孫

見し その風俗の人〻は 世くらうとしまへバ 都をもらしくなう
へくつ見え人へ 知しとする時に 二人ハ 丹次郎が右と左へ 並んだる
と座し ●ころあく ▲ヲよそ下 ●へおくづるは君の丹次郎 ▲へ女房さんにせうた
ろハかまへといつちやアそれが可愛くれる ●へそれより盗人と
いふおさやア見形よく見えバ貸借 ▲へそいつハろくいやア マア
かゝり 丹「アイヤ まあお二人ながらの仲よくお言葉かゝるへ 其
女房 ●へむかしは押がはなへ 畠山さまの宝のを てうらう
込で梶原景時へ貴つけく 食残らずおめへが巻あげ世

間八分散ぢやうぐといふやつさ▲〽婦多川の娘若を囲って
嘸イたのミ宅で嘸こんなかけのしい不塩の娘をこさき
まとり逃で●〽朝ッぱらから千話ぐるひはおんまり押がつよ
うらやう▲〽て色男ハ外ハ何がなるろ●〽かくりふやく丹ひらうが
あるい丹〽イヤもとミへけしからぬ▲〽とうぐくしが隠居するう
と言イせりふもおらしくねへ●〽縄かけるのが一番あつべ▲〽異
ミすのえまちの衣代金がおけりやちそといへふ●〽ヲイ
めどえの代わりのが▲〽それふみとるしまきうふそうも なる

本田之三郎

朝(あさ)霜(しも)や
凍ぞ解(とけ)かぬ
縄手(なはて)こみち

めへ●二「サア代官所へ引ずらうかト　丹はらが立ばおまへをよぶもしかねぬ　ゑもしくごけりく

云「アノお金がいくらあると丹えを堪忍するのが[illegible]

ますエ●二「そこでお娘が仲人のそんあつて二人が退して此場

いまとなすくちかゞとり小判でざつと五十両▲「かうとりふお

娘が二三年おいらんありや座不内済丹「イエく此子

いや義理ある妹ながらしてその振る舞ひが●「でかしたぞア座不

代官所へ▲二「そこでめんどうござんすがお旦下やとうつよりなをよいは

まくぞおそぞお持なさつて下さいまし丹えのかゝとりふ

コレマア兄をだましてお金銭まで盗ませしと
申して。「ヤレ／＼いかい御信切のおぼしめし、そなたのおめへの
性根ひるめへじてト [illegible] 伴「丹江郎はなにしても
あのきむすめはあまさりの悪漢ども処動くるみト この事のあらまし
ところをきゝつけ伴人 伴「ヤイ盗人ども丹江郎やこの娘をうばはんとする
「ヱイ 「サア畠山の宝の一件 伴「詮議いたすは誉田の次
郎この近常が人の頼みます。「ヱイそれあらあるくらゑ
畠山の 伴「家中ともあれ申上げ君ト

ヤイやろふ詮義の丹次郎 役「おまへハ身形で人の

詮さくその方ぞ女いづれの御家来次第温袍不

きやうぶ三尺帯つんまへ丸腰五分月代ハデ珍らしへ御流風

ざ早く風通りを退すへ申しちるね ト手ろぶの扇をもち川て

ござりますごんす▲一「めくころゃアイと あくびをつく 役「ヤイ

そもそもへゆげぞし 丹次郎其方まんまと存ぜず千代が子をへ所印

形の謀判あろうとももちがねの方へのぢ百落度去

あら右の金子を年々不割村上納いたすなるべ

格別の慈悲をもつて済し金えと同役の損ぐわ
よつて内金二千両明後日まで金役者まで持さえ
いつせ迷惑なれバご金子の百分一ぶもならざる
上納ならずといへどもせめてきてべと計りにそ表
いよねハいよに孫婿大家の藩中役柄の人に
又くわしく申しれき

春色梅児誉美 五了